慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シンポジウム「有賀喜左衛門と社会学」を聞いて
Sub Title	
Author	関根, 政美(Sekine, Masami)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2000
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.5 (2000.) ,p.93- 95
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集II: 「有賀喜左衛門と社会学」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20000000-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シンポジウム「有賀喜左衛門と社会学」を聞いて

関根　政美

私は、大学院修士課程と博士課程を通して、有賀先生が慶應義塾で 1979 年に最終講義をされるまでの合計4年間先生の授業に出席し、先生の最後の学生の一人となった。その4年間の授業のなかで今印象に残っているお言葉は次の二つである。まず第1は、「君達はちっとも私の言うこと分かってくれないね」というものである（よって以下のことはちと眉唾物かもしれない）。第2の言葉は「文化は外国の文明と交流しながら発展する（日本の文化もそうだ）」というものである。これは、文化交流発展論といってよいかもしれない。確かに文化の基層は簡単に変化しないかもしれないが、外国文化・文明との交流を通して世界の文化は独特な文化を創り上げてきたというわけである（中野先生は当日、「激しい」交流のなかでと論じられていた）。ただ、新しい文化の創造には伝統の一部が必ず利用されるから常に文化には連続性があるということになる。そして、そのなかで長年にわたって利用されてきた文化要素が日本文化の基本的特質（民族的特質）となるということである。その民族的特質とは、今の時代ならエスニシティ、エトノス、エスニー（エトニ）などとよばれるものかもしれないが、具体的にいうならば、家連合であり同族団的社会関係であるということになる。

この家連合・同族団的社会関係は、柿崎先生の発表によると有賀先生が発見されたものということになるが、この文化的要素は有賀先生によると室町時代以前に形成されていたのではないか、あるいは縄文時代にあったかもしれないということになる（雑談で縦穴式住居のことを熱心にお話されていることを思い出す）。そこで、私達学生は最後の3年間先生の御主著『日本家族制度と小作制度』をはじめっから読まされたのである。古文書読解のトレーニングを受けていない我々には、古文書なぞいくら活字になっていたって読めるわけがない。苦労したものだ。結局、私達は読めないから先生が音読するということになってしまった（その声はテープになって我が家の家宝となっている）。

ところで、有賀先生が文化の交流発展論を展開したのは、こうした家・家連合・同族団が戦後消滅していくなかで（実際、有賀先生は、家・同族団は近代福祉国家の発展の中でその役割を終えていくと考えられていたようである）、農村研究のなかで発見された家・同族団的結合は、欧米文明との交流のなかで、近代日本社会の天皇制国家や日本的経営等の発展の中に生かされ、埋め込まれて新しい日本文化を創造する土台となったという議論につながり、晩年は中野先生ご指摘の通り巨視的な研究へと進まれたのである。

ところが、こうした巨視的な研究は、近年ではカルチャー・スタィーズやポストコロニアル

研究者から重大な批判に晒されている。要するに、日本文化研究の多くは、日本文化という支配的文化を閉鎖的な枠組みをもち固定化・特権化する。つまり、「本質化」するものである。その結果、日本の同化主義を強化し結果的には異文化マイノリティの差別を強化する「言説」であるとして強く批判される。時折そのなかに有賀先生の名前や著作も含まれているのである。要するに、有賀先生の議論は（反動的な）ナショナリスト言説にすぎないと一蹴される傾向が強いのである。

有賀先生が授業や授業後の雑談でされたお話を伺ったものとして、私にはこうした批判がどうも不公平で一方的なものに思える。既に冒頭で示したように有賀先生は文化の交流的発展を論じられていたし、家・家連合・同族団の消滅も予期されていたのであるからである。ただ、日本の基層的な文化である同族的社会関係は古くから存在したということと、それが次の新しい日本文化の創造の土台となり連続性は続くということを強く強調し、また農村社会の社会関係が日本社会全体を規定するという議論をされたことは確かであり、それが通俗的日本社会論・日本人論に利用されたこと、御自身もそうした議論に加担するかのような議論を展開されたことも確かであるが、それでも私には最近の批判が不当に思えてしまうのである。

つまり、私には有賀先生は日本的特質とした家・家連合・同族団的結合そのものの消滅も予測されていたように思えるからである。それが、冒頭の「君達はちっとも私の言うこと分かってくれないね」という言葉になったのではないかと思う。シンポジウムのコメンテーターとして参加されていた柄沢先生は私と一緒に授業に参加されていたが、彼に対しては「君にはセンスがない」と先生は述べられたと打ち明けていた。これは意味深長な言葉だと思う。つまり、柄沢先生の頭が悪いといっているのではない（と信じたい。そういえば先生は暑い時には扇子をもっていた。「僕には扇子があるよ」）。要するに授業に参加していた若い連中は、同じ文化を共有していないから自分の言っていることが分からないという諦めの言葉なのではなかったか（私達は＜同じ日本人なんだから＞と分かった振りをしていただけなのかもしれない）。

先生との最初の１年間には、まず、家・家連合・同族団と日本の近代社会の発展を中心とする議論を伺ったが、翌年から、その日本文化の特質たる家・家連合・同族団のルーツ探しとして『日本家族制度と小作制度』を読むことになった。今となって考えてみると日本的特質の終わりとはじめについて有賀先生から授業を受けたのではないと思えるのである。こうしたなかで、ちっとも分かってくれないセンスのない学生と一緒に授業をやっていることから、日本の民族的特質も消えていくのではとお思いになられたのではないのだろうか。民族的特質を議論されながら、それが未来永劫に続く特質だなどとは一言もおっしゃらなかったし、一方で柔軟な文化・文明論を展開された有賀先生の議論の片面だけを見て一方的な非難をする人々は、有賀先生の議論の全体を見ていないのである。むしろ、反本質主義的な文化論を展開する気配もあったことをもっと積極的に評価すべきではなかろうか。私自身はこの文化交流発展論を多文化主義研究に生かしたいと思っている。

今回の「有賀先生と社会学というシンポジム」では、最近の日本社会論（有賀先生含む）批

判を考慮した上での有賀社会学の選択的で継承的発展を論じるという視点からの議論はなかったように思える。現在の日本社会論批判のなかで一片のナショナリスト言説に過ぎないと片付けられそうな事態をもっと直視しないと、豊穣な有賀社会学の成果も十把一からげに過去の暗やみのなかに葬り去られてしまうかもしれないと思う。そのことを考えると、この大きな文化社会変動の時代に有賀先生を積極的に評価し回顧しようとするシンポジウムの存在は、有賀社会学の選択的継承を考える上でタイムリーであるとともに有意義ではなかったかと思う。

（せきね　まさみ　慶應義塾大学法学部）